

師範學校

國文教科書

本科用

卷三

5a
810
B445

42568

教科書文庫

4
810
51-1912
20000
67992

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

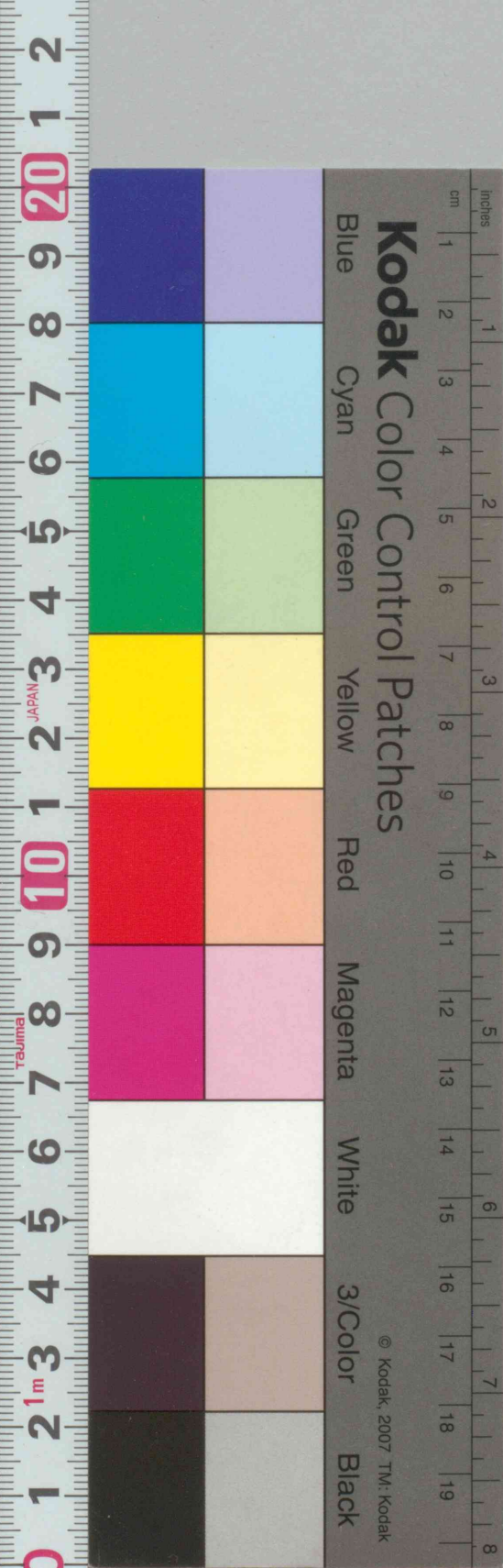


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

文部省檢定
師範學校國語教科書
明治四十五年二月十三日

52
810
明45

吉田彌平編

本科用

師範學校
國文教科書

東京
光風館藏版

卷三

師範學校 國文教科書 本科用 卷三

目次

一	春の詩(口語文).....	夏目漱石	一頁
二	修善寺便(候文).....	尾崎紅葉	六
三	葛の若葉(新體詩).....	大和田建樹	二
四	武士道その一.....	山路愛山	三
五	武士道その二.....	山路愛山	三〇
六	熊王の發心.....	隱士松翁	三六
七	盲啞の教育(口語文).....	横山榮次	三三

目次

一



八	四時のあはれ	兼好法師	四〇
九	荒れたる御堂	兼好法師	四〇
一〇	にんわじのほつし(分別書方)	けんかうほつし	四七
一一	これも	兼好法師	四八
一二	汽車に乗りて(新體詩)	上田敏	五一
一三	靜思と活動	三宅雪嶺	五六
一四	先進遺響	渡邊無邊	六一
一五	芳流閣上の奮闘その一	瀧澤馬琴	六五
一六	芳流閣上の奮闘その二	瀧澤馬琴	六九
一七	佐渡が島(口語文)	尾崎紅葉	七五

一八	唐錦(短歌)		八〇
一九	國語と愛國心	上田萬年	八三
二〇	落花の雪		九〇
二一	松の下露		九六
二二	はぎ(狂歌)		一〇七
二三	祖先崇拜(口語文)	芳賀矢一	一〇九
二四	東郷大將	尾崎行雄	一一〇

師範 學校 國文教科書 本科用 卷三 目次終

師範 學校 國文教科書 本科用 卷三

一 春の詩

夏目漱石

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下したが、どこで鳴いて居るか、影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせと忙がしく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が居たゞまれない様に氣をそゝる。かの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、又鳴き

くらさなければ、氣が濟まんと見える。その上何處までも登つて行く、何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて、漂つて居るうちに、形は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空の裏に残るのかも知れない。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落ちる所を、際どく右へ切れて、横に見下すと、菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛びあがつて來るのかと思つた。

際どしー眞際
に近しー
分目に通つて
るしー

次には落ちる雲雀と揚る雲雀とが十文字にすれ違ふだらうと思つた。最後に、落ちる時も、揚る時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に、眼が覺める。雲雀の聲を聞いたときに、魂のありかゝ判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれた

ものゝうちで、あれほど元氣のあるものはない。ああ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

*英國の詩人。
一七九一—一八三三。

忽ち^{*}シェリーの雲雀の詩を思ひだした。口のうちで諳誦して見たが、覺えてゐる所は僅か二三句しかなかつた。

前を見ては、後へを見ては、物欲しとあこがるゝかな、われ。腹からの笑といへど、苦のそこにあるべし。うつくしききはみの歌に、悲しさのきはみの想、籠るとを知れ。

萬斛^{マンカク}愁^{シュ}—
極めて多くの
うれい、
誰^{カレ}知^ラず^シ、
カ—

成程いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひきつて、一心不亂に、前後を忘卻して、わが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩には、よく萬斛の愁などと云ふ句がある。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜もあらうが、無量の悲も多からう。そんならば詩人になるのも考へものだ。
しばらくは路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つづけてある。足の下に時々蒲公英を踏みつける。

鋸の様な葉が遠慮なく四方へのして、まんなかに黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をとられて、踏みつけたあとで、氣の毒なことをしたとふりむいて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかにすわつて居る。(草枕)

二 修善寺便

尾崎 紅葉

再啓。昨日は雨の日暮し無聊に困しみ、夕景始めて傘撃して川向の小山なる頼家公の墓を拜し申候。「時政爺の邪慳何ぞ今に執著して假さ

桂川。

邪慳—若しは心くは
桂川—
幸—
か—

宿業—宿世
の業
前世の因果
古—

低回—うな
た—

考證—
—

ざることかくのごときや」と見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱を末代にさらされ候事、御身一たびは征夷大將軍の顯榮にものぼりたまひつる御運にして、如何なる前世の御宿業にやおはしけん、と低回去るに忍びかね候。墓畔に尼將軍建立の一切經堂あり。是こそ公の奥津城にして、現在の五輪塔は、後人の御墳無きを慨きて假に建てたるものなりとの考證これあり候。されば右の經堂の大破、安置せる丈

源範頼。

六佛の朽廢亦決して懐古の暗涙を斂めしむべきにあらず候。蒲冠者の墳は未だ弔はず直鄰に候へども修禪寺にも參詣致さず候。追つて一見の上申上ぐべく候。

此の日は一日閉居の餘り入浴七度に及び剩へ連夜の按摩尤も勁く、全身綿の如く相成り、疲勞度に過ぎて終夜眠る能はず黎明始めて交睫して覺えず十一時に至り候處、快晴の天氣玲瓏玉の如く、踊躍して獨鈷の湯の撮影を試みんと逸り候程に、過りて三脚柱の腰部をへしをり、尠か

玲瓏—明らかなるさま

桂川の川中に湧き出づ。

らず當惑致候へども、應急の手術を施し、やをら湯の上流の淺瀬に蹈入り、ピント合せ候が、ひまどり候程に水中の赤脚寒に堪へず、而も來浴者頻々として然るべからざる處に長き布を翻し、或は目障の邊に著物を脱ぎ放しなど、始終ピント安を妨害致候爲、技師の難澀これに過ぎず候ひき。辛うじて一照致候へども印畫の安否甚だ心許無く存候。

それより去りて川下なる廣機の瀧に赴き、馬車屋の前なる阪道の中段に機械を立て候處、畦下

空惚 コウソウ
又 困筆
鹿鹿筆
粗末筆
おれ筆

なる馬の湯に上下する四足の往來ありて、屢これに道を讓るべく餘儀無くせらるゝため、空惚の間に速寫機を拵りて立退き申候。此の寫眞修行の前、人の需によりて少々麤筆を揮ひ申候。然るに僻境の惡箋用ふべからずなど不足を申候處、亭主の才覺、紙門に貼りのこしの地紙裁ちて持來り候に、居然たる檀紙金砂子の好短冊を得候こそ風流この上なく、感心致候へ。
二日の雨にて椎茸出來候へば味淋醬油の附燒

炒豆 イリ豆

に致候。今は春子のすがれにて、肉薄く、氣も亦微には候へども、山廚の佳味侮るべからず、平椀中、常に幅する所の陣笠の如き物とは箸を同じうして論ずべきにあらず候。
本日は食福の日にて、午後には合宿の衆より炒豆草餅を貰ひ、夜に入りて友人より新杵の一折を贈られ候。胃病の人、毎に餓鬼の如し。幸に食談の煩を咎め給ふなかれ。草々不盡。(草紅葉)

三 鳶の若葉

大和田建樹

削りなす巖三丈、

河岸に額の如く、

突出でて水をぞ覗く。

額より千筋八千筋、

繰りおろす緑の絲に、

美しき玉ぞ貫きたる。

その玉は蔦の若葉、

その絲は蔦の若づる。

藥玉を神の作りて、

御空より下げたる絲か。

瓔珞 ヤウラク

婦人のたま
かざり

瓔珞を佛の垂れて、

雲井よりゆらがす玉か。

一筋を取りても見んと、

青柳の樹陰の蛙、

飛びつけど丈こそ足らぬ、

伸せども手こそ届かぬ。

紅葉せん秋待遠き

この蔦、この岩。(野菊)

四 武士道 その一

山路愛山

稱徳天皇^{*}。

神護景雲三年、朝廷警衛のため、東人を召させ給ひし時の詔に、「東人は、常に額に箭は立つとも、背には立てじ。」といひて、君を一心に護るものぞ。」とあり。東國は蝦夷と境を接して、人種の生存競争劇しく、戦争なども多かりしゆゑ、自ら健氣なる風をも養成したるならん。蝦夷の叛亂聞えずなりし後も、天慶以來幾度か干戈動き、大名・小名の私鬪も亦少からず。人氣自ら上國に殊なり。かくて武士道といふものもこの間に成長したり。

武士道とは如何なるものぞや。一定の釋義を下す

吾妻鏡^{*}。

はむづかしきことなれども、まづは武士の間に行はれたる面目律とも云ふべきものなり。されば武士道にて第一に禁句とする所は、臆病といふ事なり。頼朝は石橋山の厄難の時、日頃髻の中に隠しおきたる觀音の像を取出し、我が首、若し大庭等の手に渡らん時、髻中に此の本尊のあるを見れば、源氏の大將の所爲に似ずとて嘲らるべし。それが口惜しければ斯くは取出し奉るものなり。」と云へり。崇徳上皇、爲義を白河殿に召させたまひし時、爲義、昨夜の凶夢を陳べて、御身方たるべき仰を辭退せんとしたるに、使の

保元物語。

殿上人、武將の身として夢見物忌などは餘りに後れたる沙汰なり。といはれしかば、爲義實にも。とて參殿に及びたり。

保元物語。

宗旨も信仰も、武士に取りては日常の事なり。一旦非常に臨んでは唯何事も惑はず突進するが武士道の極意なり。されば保元の亂に、重盛は、救命を蒙つて罷向ひたるものが、敵陣強しとて引返すべきやうやある。といきまき、平治の亂に、義朝は義平の敗軍を見て、義平が河より西へ引きつるは、家の疵と覺ゆるぞ。今は何をか期すべき。討死せんのみ。と云ひて、

平治物語。

平家物語。

敵陣に馳突したり。臆病は弓矢の疵となるべきものなれば、寧ろ死すとも卑怯の振舞すべからずとは、武士道の第一義にして、神護景雲の詔に、額に箭は立つとも、背には立てじ。とあるものと同意なり。如何なる場合にも、逃げたりなど云はれんは口惜し。侍程の者が一度申さじと思切りしことを、たとひ拷問せられたればとて申すべきやうなし。と云ふが如く、何事も思切つて悪びれぬを武士の魂とす。

承久繪物語。

次に、其の頃の武士道にて宗と重んじたるは志の專一なることなり。尤も、大名は草の靡き。と云ふ諺は

保元物語。

其の頃よりあり。強さうなる方に加擔して所領安堵を求むるは一般の習なりしかども、さりとして輿論はかく意氣地なきを善しとせしには非ず。主従の義を重んじ、志を主人の家に盡すを以て、眞の武士の面目とし、殊に主家の盛衰に従つて向背の態度を變ずるを以て醜事としたり。されば源氏に従ふ武士は、源氏に二人の主とることなれば、宣旨なりとて、えこそ内裏へは參るまじけれ。」と云ひしものもあり。「源氏の習、心がはりやあるべき。」とて肩を怒らし、ものもあり。「凡そ武士には二心を恥とす。殊に源氏

平家物語。

の習は左様に候。」と力みしものもあり。平家に従ふ武士も、忠盛の家の子には、主君若し辱しめられたらんにはえこそ遠慮はすまじけれ。必ず殿上までも斬りいらん。」と決心したるものもあり。平宗清は頼朝の恩人にて、頼朝より關東に來らば善く扶持せん。」と言送りたれども、平家零落の後、頼朝に參向する一條、尤も恥ぢ存じ候。」と云ひ、直ちに屋島の内府に參り、運命を主家と共にしたり。齋藤別當實盛は、吉についてあなたへ參り、こなたへ參らんは見苦し。今は源氏の世盛となりたりとも、我は平家の身方となり

零落—落るがこと

吾妻鏡。

平家物語。

て討死せん。」とて、黒く染めたる白髪首を木曾義仲の士に取らせたり。

五 武士道 その二

山路 愛山

斯く臆病を惡み、主人に忠志の專一ならんことを宗としたる武士道が、其の結果として死生を度外に置きたるは當然なり。東國武士が平家を西海に討ちし時、病身ながら天下の重事なり。坐視すべきに非ず。とても死ぬる身ならば戦場に死なん。」とて出陣したる者のことは、吾妻鏡にも見えたり。「事あらば

保元物語。

眞先かけて命を主君に奉らん。弓矢執る身は、死すべき處を遁れぬれば、中々最期の恥あるなり。」とて、腹搔切つて死したるは、其の頃の武士の習なれば、義朝も、合戦の場に罷出でて何ぞ生命を存ぜん。」といへり。されば頼朝が十四歳にして父撃たると聞きながら、自害をもせず、池禪尼にすがりて、かひなき生命を助かりしを、時の人は善くも言はざりしなり。

此の外、其の頃の武士道にて殊に著き一箇條は、人々互に功名を競ひたることなり。爲朝が白河殿にて、^{保元}我は親にも連れらるまじ、兄にも具すまじ、功名不覺

保元物語。

も紛れぬ様に、唯一人いかにも強からん方へ差向け給へ。敵たとひ千騎もあり、萬騎もありとも、一方は射拂はんずるなり。」と廣言したるは、最も善く武士の氣習を言ひあらはしたるものにて、佐々木・梶原の宇治川先陣なども其の一例なり。

但し弓矢の道と云ひ、武士の道と云ふもの、畢竟自然に生じたる武士の面目律にて、多くは無意識の間に發達したるものなれば、此處までが武士道、此處までが武士道に非ずと、明らかに區別を立て得べきものに非ず。さりとして其の面目律の制裁は、賴朝時代に

*平治物語。

ても中々嚴重にして、武士道に外れたるものは武士の間には生きて居られぬ程なりき。たとへば平治の亂に源氏の士、藤原信賴を見限り、此の殿は、人に頼を打たれて、返事をだにしたまはねば、侍の主には叶ひ難し。」と云ひしが如く、大將若し武士道の心得なければ、士卒つかず、侍若し名を惜まざ、卑怯の振舞あれば、武士の間に齒せられざりき。而して此の武士道は東國に盛にして、都には流行せず。都は柔弱者の寄合なりし故、天下の勢つひに上軽く、下重くなりて、日本未曾有の大改革とはなりたるなり。

さりながら東國の武士が天下の主人となりたるは、
 獨り武士道の盛なりしが爲には非ず。保元以來、都
 に兵事多く、京洛の客往々四方に散じ、天下經營の知
 識に東國の武力を合併したるが故なり。近き世の
 薩摩の事も之に似たり。薩藩は武道の盛なる處に
 して、百二都城の健兒は勇氣に於て天下無比なりし
 かども、それだけにては天下に功を立つることもな
 らざりしに、島津齊彬の祖父重豪、隱居して榮翁と稱
 せし人、薩摩の邊土にて武士の片意地なることを憂
 ひ、天下の形勢をも知らしめんとし、勉めて上國の風

經綸——天下を治むる爲む
 主義

を移し、より、薩藩固有の武士氣質と上國の知識と
 は此に相合して、薩人始めて眼を天下の形勢に開く
 に至れるなり。東國の強きのみにては、未だ天下を
 圖り難し。頼朝は北條・三浦・千葉・小山など云ふ東國
 武士の力を假りたると共に、大江廣元・三好康信など
 云ふ京洛の客を愛し、其の經綸の知識を用ひたるな
 り。武士道も開化せざれば唯強きのみ。天下の形
 勢を辨へ知る知識と武士道との二味が調合して、始
 めて役に立ちしなり。(愛山文集)

六 熊王の發心

隱士 松翁

*
正平七年。

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に度々謀られけるを、くちをしく思ひこめて過したりけるに、去ぬる住吉の戦に討たれて失せし宇野六郎といひしが、子に熊王といひけるが、まだをさなきとき、光範にいひけるは、正儀は我がためにも親の敵にて候へば、いかにもして討ち侍らん。河内へ越えて正儀に仕へ侍らんに、をさなく候へば、なごか心を許し申さぬことのあるべき。たとひ心を許すことのあらずとも、七年八年ほども仕へ候はゞ、

そのうちには討ちぬべき便の、争でなからん。御暇をこそ賜はらめ。」と涙を流せば、光範もいとあはれに思ひながら、幼ければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は命に代りて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべければ、と強ひて止めたまひけれども、少し大人しくなりなば、よも近づけたまはじ。をさなくありなんとき参りてこそ。」としきりに望みければ、力及びたまはで、常に身を放ちたまはざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ。」とて、阿倍野まで人數多添へてやらせけるに、それよりは我に等しき童一人を具し

て、赤阪の城に行きてそのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらん。」と尋ねられて、「われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といひける者の小子に熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は去にし時住吉の戦に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひうちて領地を奪ひ候へども、光範と力を合せ候へば、せんかたなくて、いかなる寺へも入り侍りて、僧法師にもなり父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。」といひけるを、あはれと聞きて、まづ我が方に伴ひて様々

勞りて、後に正儀に、ありつる事を語りて、をさなくは候へど、心のさかしくして、「など申すに、あはれがりたまひて召寄せたまへり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思附きて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五ほどになりければ、河内の國にて少しなる處を取らせん。」といひけれども、「いかで、恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。」とて辭しにけり。

明くる年の春、父が七周に當りけるに思ひつけて、今宵、正儀を討ちて父の手向にもし、光範の心をも安め

奉らん。」と思ひたちてありけるに、その日御前に召して、今日は吉日にてあるなれば元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿より賜はせたる鎧を賜ひければ、涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正儀の御前にありけるが、またふと思ひ出でて、討ち奉らんならば、今宵こそ。」と思ひて、膝をおしなほして正儀に目を懸くれば、年頃の情深かりしこと、今日の元服の事など思續けて、いかで情なく討ち奉らん。」と思ひかへして心を鎮むれば、父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方なら

ねば。」と思定めけれども、何心もなくわたらせたまふ有様を見ければ、御いたはしくて堪へかねけるにや、廣縁に出でて聲をあげて泣き號ぶを、人々も正儀も覺束なく思ひたまうて、障子を開きみたまへるに、伏沈めるさまのたゞには見えざりければ、いかに。」と問はせたまひければ、ありつる心のうちをまをして、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために自ら死なんより外は候はず。」とて刀を取直せば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら、いかでさはあらんと、とりつきてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて

*河内國南河内郡池島村にあり。

髻おしきり、往生院にて形をかへ、君より賜はせたる名なればとて正寛法師とぞいひける。寺の傍に草の庵を結びて、もしも心のかはることのありもやせん。とて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範より賜はせける刀は、ありし有様をくはしく書添へて返しけりとかや。いとあはれなりける事にこそ。(吉野拾遺)

七 盲啞の教育

榎山榮次

十九世紀に於て、大いに驚嘆すべきものはナポレオ

米國の人。一八〇一。

米國の文學者。一八三一。



Affectionately yours Helen Keller

へレンケルラー及び筆蹟

ンとへレンケルラー女史である。とはマークトウェインの揚言した所である。實にケルラー女史の、啞者で、聾者で、盲者で、然も高等の教育を受け得たのは天下の偉觀である。しかしながらケルラーは完全なる學校で十分なる指導の下に良好なる教育を受け、それで以て目明きの學者にも匹敵すべきらしい者となつたのである。之に反し、我が塙檢校保己一は、

不幸の境遇に人となり、兩富檢校の懇切なる指導を受けたとは云ひながら、普通の人の教育に就いてすら何等の研究も無かつた當時のことであるから、盲者の教育に對しては勿論何等の方法もなかつた、その時に於て殆ど全く自家の努力即ち自己教育によつてあれほどの大家になつたのである。即ち目明きの學者に匹敵すると云ふ程度を跳び越して、目明きの學者を指導すべき大學者となつたのである。又啻に一世の思想を支配すべき學者となつたばかりではなく、永く後世に傳へらるべき大家となつた

のである。盲啞聾の三つを兼ねながら、あれ程に發達したケルラー女史を驚嘆すると同様に、五歳の時より全く明を失つて幾多の艱難困苦に堪へながら、あれほどの大家になつた檢校の生涯にも亦驚嘆せざるを得ない。マーク、トウ、エインをして塙檢校の傳記を知らしめたならば、ナポレオンやケルラーと同様に、十九世紀に於ける驚嘆すべきもの、一として、檢校をも擧げたであらうと思はれる。ケルラーの事蹟は盲啞教育法のどれほどまで効果を收め得るといふことを示して居る、塙檢校の生涯は自己教

育のどれほどまで成績を擧げ得るかといふことを語つて居る。

盲目の檢校をしてあのとほりのえらい大家とならしめたのは其の耳であらうか。換言すれば其の聽覺が非常なためであらうか。傳記の示す所によれば、檢校の耳は非常に勝れてゐたと稱することは出來ない。三年間音曲を習つたけれどもすこしも進歩しない、調子さへ合すことが出來なかつたと云ふではないか。是には勿論檢校の志が音曲に冷淡であつたと云ふことも原因したてであらうが、生來の耳

が音樂的に出來て居ないといふことも確かに其の



一 己 保 瑞

原因をなして居る。然るに此の無器用なる耳を知識の入り口として、あのやうなえらい學者となつたのは實に注目すべき點である。覺官は知識の門であるから、其の大切であることは固より言ふまでもないことであるが、しかし今の教

育は此の覺官に對して門番以上の價值を付して居るのではあるまいか。若しさうであるとすれば、塙檢校の傳記の如きは左様な考に對して一の警戒となるであらうと思ふ。

盲啞教育の必要なことは今更言はずとものことであるが、今日の有様では猶微々たるものであると云はねばならぬ。是には種々の原因もあらうが、世人が盲啞教育を以て單に盲啞者に對する慈善的の事業に過ぎないと見做して居ることも、其の一因となつて居るだらうと思ふ。盲啞教育が決してそれだ

けの意味のものでないと云ふことは、塙檢校の事蹟が之を明示して居る、ケルラー女史の生涯が之を證明して居る。盲者、啞者の中にも斯様な人物があるとするれば、其の天才發揚の機會を與へないで、空しく廢人として社會の底の方に埋没せしめるのは、社會國家のためではあるまい。よし檢校やケルラーのやうなえらい者が容易に出ないにせよ、兎も角も盲啞の中から社會の役に立つ人間を作り出し得ることとは明らかなる事實である。盲啞教育は世の不幸者に對する慈善的の事業であるのみならず、社會國

家のために有用なる人物を作り出し得る教育であるといふことを忘れてはならぬ。(瑠檢校詳傳)

八 四時のあはれ

兼好法師

折節の遷り變るこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされ。と人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮き立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草萌え出づる頃より、や、春深く霞みわたりて、花もやうくけしきだ

春はたゞ花のひとへにさくばかりものゝあはれは秋ぞまされる。

さ月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする。

賀茂の葵祭 四月の中の酉の日。

つほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたしう散り過ぎぬ。青葉になりゆくまで、萬づに唯心のみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、いにしへの事も、たちかへりこひしう思ひ出でらる。山吹の清げに、藤の覺束なき様したる、すべて思ひすてがたきこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ世のあはれも人のこひしさもまされ。と人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水鶏の叩くなど心細からぬかは。六月の

*あほしき事
いはぬはげ
にぞはらふ
くるゝこゝ
ちしける。

頃あやしき家に夕顔の白く見えて蚊遣火ふすぶる
もあはれなり。六月祓またをかし。
棚機祭るこそなまめかしけれ。やうく夜寒にな
る程、鴈鳴きて来る頃、萩の下葉色づく頃、早稻田刈り
ほすなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。又野分
の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語枕草
子などにことふりにたれど、同じ事また今更に言は
じとにもあらず。思しき事言はぬは腹ふくるゝ業
なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいや
りすつべきものなれば、人の見るべきにあらず。

さて、冬枯の景色こそ秋にはをさく、劣るまじけれ。
汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置ける
あした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮
れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞまたなくあはれ
なる。すさまじきものにして、見る人もなき月の寒
けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。
御佛名荷前の使立つなどぞあはれにやむごとなき。
公事ども繁く、春のいそぎに取重ねて催しおこなは
るゝ様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ
面白けれ。つごもりの夜いたう暗きに、松どもとも

して夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん事々しくの、しりて、足を空にまどふが曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、此の頃都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあはれなりしか。かくて、明け行く空の景色、昨日に變りたりとは見えぬど、引替へ珍しき心地とする。大路の様、松立て渡して、華やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。

(徒然草)

九 荒れたる御堂

兼好法師

世の中は何か常なるあすか川さのふの淵ぞ今日は瀬になる。
桃李不言春幾暮、煙霞無跡昔誰栖。

關白藤原道長。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、樂しび悲しび行きかひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住處は人改りぬ。桃李ものいはねば、誰と共に昔を語らん。まして見ぬ古のやむごととなりけん跡のみぞいと果敢なき。京極殿法成寺など見るこそ、志留り事變じにける様はあはれなれ。御堂殿の造り磨かせたまひて、莊園多く寄せられ、わが御族のみ、帝の御後見世のかためにて行末まで。とおぼし置きし時、いかならん世にも

阿彌陀堂と
もいふ、法
成寺の境内
にあり。
藤原行成。
三蹟の一人。
大和守藤原
兼行。畫を
善くす。

かばかりあせはてんとはおぼしてんや。大門・金堂
など近くまでありしかど、正和の頃、南門は焼けぬ。
金堂はその後、倒れふしたるまゝにて取立つるわざ
もなし。無量壽院ばかりぞそのかたとて残りたる。
丈六の佛九體いと尊くて並びおはします。行成大
納言の額、兼行がかける扉、あざやかに見ゆるぞあは
れなる。法華堂などもいまだあるめり。これもま
たいつまでかあらん。かばかりの名残だになき處
には、おのづから礎ばかり遣りたるもあれど、定かに
知れる人もなし。されば萬づに見ざらん世までを

思ひおきてんこそ果敢なかるべけれ。(徒然草)

一〇 になわじのほつし けんかう ほつし

になわじ にある ほつし としよる まで いはしみづ
を をがまざりければ、こゝろうく おぼえて、ある とき
おもひたちて、 たゞ ひとり かち より まうでけり。
ごくらくじ・からら などを をがみて、かばかりとこゝ
ころえて かへりにけり。さて かたへのひとにあひて、
「としごろ おもひつる こと はたしはべりぬ。きゝしにも
すぎて たふとくこそ おはしけれ。そも まるり たる

ひとごと によまへ のぼりしは なにごと かあり
 けん、ゆかしかりしかど、かみへ まゐるこそ ほしい
 なれ と おもひて、やままで は みず」とぞ いひ
 ける。
 すこし の こと にも せんだち は あらまほしき こ
 と なり。(つれづれぐさ)

一一 これも

兼好法師

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする
 名残とて、各あそぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあ



(華國) 筆 蕙 一 田 浮

まり、傍なる足鼎を取りて頭
 に被きたれば、つまるやりに
 するを、鼻をおし平めて、舞ひ
 いてたるに、満座興に入るこ
 とかぎりなし。
 暫し奏でて後、抜かんとする
 に大方抜かれず。酒宴事さ
 めて、いかゞはせんと惑ひけ
 り。とかくすれば、首のまは
 り缺けて、血垂り、たゞ腫れに

一一 これも

腫れて、息もつまりければ打割らんとすれど、たやすくわれず、響きて堪へ難かりければ、叶はて、すべき様なくて、三足なる角の上に帷子を打懸けて、手を引き、杖を突かせて、京なる醫師のがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見る事限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこそは異様なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし。」といへば、また仁和寺に歸りて、親しき者、老いたる母など枕がみに寄りゐて泣き悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かゝるほどに、或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなとか生きざらん。たゞ力を立て、引きたまへ。とて、橐のしべをまほりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。辛き命まうけて、久しく病み居たりけり。(徒然草)

一二 汽車に乗りて

上田 敏

赤松の林をあとに、

麻畠ひだりに見つゝ、

汽車はいま隄にかゝる。

ほのかなる水のにほひに、

河淀の近きはしるし。

三稜草生ふる河原に、

葦切はけしと噪ぎ、

鶺鴒こぞこそ夏は來らね、

たま白鳥く白鳥に百舌の速贄、

篋鷺かぶは何をか思ふ、

しよんぼりと暇はらに立てり。

けけしー 異イ異イしシのノ音ネか
まほまほし かどかじし

紡績の宿にやあらん、

きり、はたり、はたり、ちやうく、

杼ひの音へだたりゆけば、

道祖神みちのつねまつるあたりか、

鐵道の踏切近く、

繩帶の檻かごのころも、

かち色は飾磨の染か、

乳吞子ちんを負へる少女は、

淺茅生あさの末すえ黒くろに立ちて、

「萬歲」と囃し送りぬ。

萬歲はなれにこそあれ、
幾年を生きよ、里の子。
人の世に尊きものは、
土の香よ、國の御魂よ。
偽の市にすまへば、
産土ウツスナの神に離りて、
養をかきたる人も、
埴安の郷のつちより、

生えぬきのなれに呼ばれて、
本然の命にかへる。

道芝の上吹く風よ、
農人の寢覺に通ふ、
微かなる土のおとづれ、
なつかしき母の聲あり。
晝さがり草の香高く、
松脂のにほひまじりて、
地の胸の乳房に溢る。

蘇門答刺の香も及ばじ。

忽ちに鐵のにほひす、

鳴神の落ちかゝるごと、

汽車はいま橋に轟く。

桁構眼路をかぎりて、

ひとり見る蛇籠の礫。(あやめ草)

一三 静思と活動

三 宅雪嶺

煩悶の静思に於ける、猶狂奔の活動に於けるが如し。

共に人生に闕くべからざる所に出て、而して其の餘弊を承けたるなり。静思は甚だ善し、活動も甚だ善し。而も煩悶と狂奔とは大いに心せざるべからず。煩悶する者は室内に閉居して物思に日を過す。活動する者より觀れば如何にも意氣地なく考へらるべし。狂奔する者は日夕屋外に營々たり。静思する者より觀れば如何にも無意義に考へらるべし。而も煩悶も静思として稱すべく、狂奔も活動として稱すべし。物は一槩に判定すべからず。害よりせば則ち害あり、利よりせば則ち利あり。

* 小人閑居爲不善、無所不至。

室内に閑居して物思に耽れば、とかく病的に化し易し。「* 小人閑居して不善をなす」と。小人の閑居するは危険なること勿論なるが、小人ならざる者の閑居するも亦決して安全にはあらず。されど閑居することは必ずしも不可ならず。人は静思して自覺し、自己の過を悟り、又人生に妙趣あるを覺ゆ。而も單に静思するのみにては足らず。静思に偏すれば往徒らに惑ひて歸著する所を知らざらんとす。此等の人々は勉めて外に出て活動せざるべからず。屋外に奔走する者は、動もすれば百方身の利を謀り、

排擠
ハイヤ
推除

他を排擠して自らの地位を高め、他を陥れて其の財を攫まんとし、弱肉強食を實行して得々たらんとす。勿論人の生存する所以、社會の成立する所以は、實に人の活動して已まざる所に存し、奮闘は眞に闕くべからず。否奮闘なければ進歩發達なく、社會は停滯し、人口は減少せん。而も唯此の如くば人生は餘りに殺風景なり。人口のみ増殖したりとて何の益かあらん。かく狂奔する者は時に静思して自ら省み、生を考へ、死を考へ、以て生活に興味あらしむべし。静思する者と活動する者とは、互に長所を交換すべ

し。世に煩悶する者、若しくは煩悶せんとする者あらば、成るべく外に出でて活動せしむるやう仕向くべし。慰藉と稱して或議論を試むるは、卻つて煩悶を長ぜしむる恐あり。屋外に事に従ひて、煩悶する違なからしむるに若かず、或は又私利を謀りて東奔西走する者あらば、成るべく誘ひて静思せしむべし。幾許か静坐して書を讀めば、奪りて飽かざるの甚だしきに至らじ。もと身と心とは相離るべからざるもの、而して動もすれば一方に偏し易し。偏するが故に弊を生ず。宜しく力の限り調和を得しむ

るに務むべし。

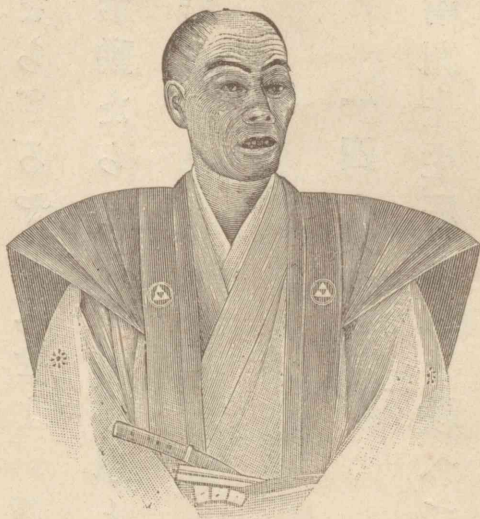
静思は煩悶とならざるやうにせよ。活動は狂奔とならざるやうにせよ。静思を静思たらしめ、活動を活動たらしむるは、静思と活動とを適當に交代せしむるにあり。(文章世界)

一四 先進遺響

渡邊 無邊

南洲先生、居常人を教へて曰く、人を相手にせず、天を相手にせよ。又曰く、命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、始末に困るものなり。この始末に

困る人ならでは、艱難を俱にして國家の大業は成し得られぬなり。」又曰く、政の大體は文を興し、武を振ひ、農を勵ます、三つに在り。百般の事は皆此の三つの者を助くる具なり。と。嗚呼此の大道學大經濟、直ちにこれを實行すれば、其の人は即ち英雄・豪傑、其の國は則ち富强充實。簡にして盡せりと謂ふべし。



(稿遺楠小) 楠小井横

小楠先生偶作の二首あり。曰く、帝生萬物靈、使之亮天功。所以志趣大神飛六合中。」又曰く、道既無形體、心何有拘泥。達人能明了、渾順天地勢。と。第一首は

帝生萬物靈、使之亮天功。
所以志趣大神飛六合中。

把捉し來つて好し。以て先生の大節を見るに足る。第二首は放縱し得て妙なり。以て先生の大略を知るべし。

帝生萬物靈、使之亮天功。
所以志趣大神飛六合中。

蹟筆楠小井横 (稿遺楠小)

象山先生嘗て曰く、日晷一移、千歳無再來之今、形神既離、萬古無再生之我。學問事業豈可悠々こと。以て其の



佐久間象山及筆蹟

半生の勤敏を見るべし。先生又漫述の二首あり。曰く、雨風月如晦、頑犬吠成羣。是亦尋常事、利害何足言と。又曰く、謗者任汝謗、嗤者任汝嗤。天公本知我、不覓他人知と。先生は學術・經濟

俱に一世の雄なり。(機外觀)

一五 芳流閣上の奮闘その一 瀧澤馬琴

禍之與福兮何異糾纏。禍兮福之所倚、福兮禍之所伏、孰知其極。下總國結城郡。

古の人謂はずや、禍福は糾ふ纏の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚る所、將禍の伏す所、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は親の遺言、記念の名刀、心にしめつ、身につけつ、艱苦の中に年を経て、得難き時を得てしかば、はるく古河へ齎して、名を揚げ、家を興すべかりしその福は

禍とふりかはりたる村雨の刀は舊の物ならで、わが身を劈く讐とぞなりし。憾をこゝに釋くよしもななく、緯急にして意外にあり。纔かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、夥多の圍を切開きて、芳流閣の屋の上に登れども、左右に脱れ去るべき道のなれば、其處に必死を竊めたる心の中はいかなりけん。想ひやるだにいと痛まし。されば又犬飼見八信道は犯せる罪のあらずして月來獄舎に繫れし禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役義。犬塚信乃を搦めよと

て愁に擇み出されつ。他の憂を身の面目に今更用ひられんこと願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ君命重く、彌高き彼の樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで身を霞ませて登りて見れば、足下遠く、雲近く、照る日烈しく堪へがたき、時は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の燄熱をわたる敷瓦は凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たるこゝ、生死の海に朝る流は名に負ふ阪東太郎、水際の小舟楫を絶え、進退既に谷りし敵にしあれば、いかでわれつなぎとめんと、颯の樹傳ふごとくさらくと

古河公方足利成氏。成氏の老臣。

登りはてたる三層の屋根にはまぶしさをよしもなく、かたみに隙を窺ひつゝ、にらまへあうて立つたるありさま、浮圖の上なる鶴の巢を巨蛇の狙ふに似たりけり。
廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし牀几に尻を打掛けて、勝負いかにと見上げたり。亦只閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、鎗長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば撃ちとめんとて、項を反らしてこれを觀る。加之外のかなたは、縣連として杳かなる河水遶りて砌を浸せ

墨翟。周の人。公輸般。魯の人。

ば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲梯なれば、地上に下るべくもあらず。渠、鳥ならねど、羅に入りぬ、獸ならねど、狩場に在り。三寸息絶ゆれば、絆みを休まん。脱れ果てじ。と見えたりけり。

一六 芳流閣上の奮闘その二 瀧澤馬琴

その時、信乃思ふやう、初層・二層の屋の上まで追ひのぼらんとせし兵等を斫りおとしつる後は絶えて近

欽明天皇七年百濟に使者しとき虎穴に入りて虎を刺殺す。和義盛の士、源實朝の面前にて長三尺方七寸の大鹿角二箇を一度に折る。

づく者なきに、今唯ひとり登りきぬるはよに覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が虎を暴にする勇あるか、又富田三郎が鹿の角を裂きたる力あるか。遮莫一箇の敵なり。ひつ組んで刺しちがへ、死するに難きことやはある。よき敵ごさんなれ、目に物見せん。と血刀を袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如き方桴に立つたるまゝに寄するを俟てば、見八も亦思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍素より萬夫不當の敵なり。さりとても搦めかねて他の援を借ることあらば、獄舎の中よりこの役義に擇み出されしかひもな

し。からめとるとも、撃たるとも、勝負を一時に決せんものを。と思ひにければ、ちつとも擬議せず、御詫ごふ。と呼びかけて、もつたる十手をひらめかし、飛ぶがごとくに方桴の左の方より進み登りて、組まんとすれど、寄せ附けず。心得たりと鋭き太刀風に撃つをばつしと受け留めて、拂へば透かさずこむ刀尖をささへて流す一上一下、迂る叢を踏みとめてしきりに進む捕手の秘術、あなたもおとらぬ手練の働、嵩より落す太刀筋をあちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主従士卒は手に汗握らざるもな

く、また、きもせず氣を籠めて見るめもいとゞはる
かなり。
さる程に、犬塚信乃は侮り難き見八が武藝に、敵を得
たりけりと思へば、勇氣いやまして刀尖より火出づ
るまで寄せては返す太刀音かけ聲、兩虎深山に挑む
とき、錚然として風起り、二龍青潭に戦ふ時、沛然とし
て雲起るもかくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏
ならば夕べの虹かと見るばかりなるいと高き閣の
棟の上に死を争ひし爲體アイダクよに未曾有の晴業なれば、
見八が被籠キゴモの鎖、肱コ當アの端ヘを裏かくまでに切裂かれ

しかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續かて、初に
淺痕を負ひしより次第に疼みを覺ゆれども、足場を
守りて撓まず、去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右
手に受流して、かへす拳につけ入りつゝ、やつとかけ
たる聲と共に眉間を望みて礪ハと打つ十手を丁と受
けとむる信乃が刃は鏢際より折れて遙かに飛びう
せつ。見八得たりとむづと組むを、そがまゝ左手に
引著けて、かたみに利腕しかととり、振ぢ倒さんとえ
いごゑあはして揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊し
く踏込らして河邊の方へころくゝと身をころばし

し覆車の米苞阪より落すに異ならず。勾配けはし
 き棧閣に削りなしたる雲の勢とまらるべくもあら
 ざめれど、かたみにとつたる掌を緩めず、幾十尋なる
 屋の上より末遙かなる河水の底には入らで、程もよ
 し、水際に繋げる小舟の中へうちかさなりつゝ、どう
 と落つれば、傾く舷と立つ浪にざんぶと音す水煙、纜
 ちようと張りきつて射る矢の如き早河の直中へ吐
 出されつ。しかも追風と退く潮に誘ふ水なる下り
 舟、往方も知らずなりにけり。(南總里見八犬傳)

一七 佐渡が島

尾崎紅葉

明治三十年
 七月三日。
 越後春日新
 田驛。

九時三十五分にこゝを發車して、忽ち眼明らかなり
 と驚けば、渺々たる日本海は折しも波に一船を著け
 ず、雲に一鳥を帯びずして、千萬頃の虚しく闊きに、唯
 池の如き潮の浩蕩として遊ぶのであつた。と見る
 に、瑠璃の煙るやうに物ありて幽かに顯るゝのを、早
 くも、佐渡々々と案内する聲がした。まことに香嶽
 樓の縁端に伸びあがつて、わが眉太し。と天の一方に
 望んだ佐渡が島は、いま目を遮る物もあらぬ三十海
 里の波の上に、温泉水滑洗凝脂」とやうにうかび出た

越後國赤倉
 温泉にあり。
 涼風のわが
 眉太し佐渡
 が島。

のである。

美なるかな、此の島の風情。凡そ眺めてかくも懐かしく、又況へん方無く心動かさるゝ遠景色は、之を他に求めて、己は有りとも覺えぬ。直江津の古い「鹽たれ唄」とか云ふに、

佐渡へくくと草木も靡く、

佐渡は居よいか、住みよいか。

とあるのを見ても、此の景に對して心を動かさざる者は無いと知れる。殊に「居よいか、住みよいか」と疑つた處に言はれぬ妙が有るので。此の唄の精神も

唯其の九字に存すれば、又此の景に人の恍惚たるのも頗る其の九字の感に堪へぬのである。

抑、此の海の雄渾と併せて此の島の秀麗を見るのは、北越鐵道線雙快の一つで、他は更に進んで、鉢崎から柏崎に抵るまで、米山峠の眞下を磯傳ひに疾驅しつゝ八門のトンネルを出入するのである。其の趣は稍東海道線の薩埵峠を過ぐるに髣髴たるのであるが、それは皮相の似たるばかりで、彼に在つては、全く此の氣魄を闕く。道は荒浪の磯邊であるから、一面巖石突兀として、或

は潮に臥し、或は草に蹲り、或は山に逆つて峙ち、或は水に臨んで仆ると云ふ有様。其の大なる者に在つては、百歩にして唾と壅がり、二百歩にして岩鼻と突出るのを、總べてトンネルに貫いて、佛に逢へば佛を殺し、祖に逢へば祖を殺し、道に當る者あれば必ず突いて進むのである。

トンネル續きの線路は碓氷であれ、箱根であれ、皆理の同じからぬは無いが、別してこゝに其の想が有るのは、長汀逶迤として六枚屏風の將に疊まんずる如き曲折を盡すが故に、甲のトンネルを出づれば直ち

に乙のトンネルの全景が見える、乙を過ぐれば丙、丙を去れば丁と、彼等の争つて五月蠅なすのが一々目に入る。譬へば、己、大剛の者にして、羣がる敵を物の數ともせず、當るを幸、一太刀つつ片端から撫斬にして通るもかくやと覺ゆる様で、而も處は弓手に方りて日本海、逃るゝ路も荒磯の浪、鞆と寄せては返す鬨の聲、馬手には峻嶺峨々として、當國無雙の名も高き米山峠は聳えたりと思へば、殆ど快極つて肉躍るのであつた。こゝを過ぐれば、汽車を嫌ふ者も汽車に在るのを忘れ、喜ばしからぬトンネルも時に取つ

ての興となつて、なか／＼神經などを衰弱させて居る段ではなかつた。(煙霞療養)

一八 唐錦

三三八—三四六。

大和國故郷なりければ

下河邊を流

つひにわづきてもかへらぬ唐錦、

たはたや何の故郷乃山。

三三〇—三六一。

春月

釋

おゆ

夕雲雀、芝生におちて聲やめば、

山よりのぼる春の夜乃月。

三三八—三九六。

書

荷田 春満

ふみわぢと、倭よとあらぬ唐鳥の

何ぞを見る乃み人の道うは。

嵐

賀茂

再興

信濃ふる菅の荒野をとぶ鷺の

つをさもた目にぬく嵐か形。

三三九—三四六。

己の像かたたる上よ

本居 宣長

志きしまの大和心を人とはじ、

あきひよにほふ山櫻ばな。

浅間山にまを神よりうけたまを

*
二四三六二五三。

をる御教は心を

*
平田篤胤

なせむふる、形さねばならず、ふるまひざれ

からむやすける人ははりなき。

一九 國語と愛國心

上田 萬年

わが日本國は一家族の發達して一人民となり、一人
民の發達して一國民となりしものにて、神別・皇別・蕃
別の名ありといへども、今日にては、すべてこれらの
種別は全く融合して一となれり。これ實に日本特
有の長所にして、一朝事ある秋に當りて、われく日

本國民が協同の運動をなし得るは、主としてその忠
君愛國の大和魂とこの全國共通の言語とをもてる
によりてなり。故に日本國民の義務として、この言
語の一致と人種の一致とをば、帝國の歴史と共に十
分に之を擁護せんことを務めざるべからず。かく
務めざるものは日本國を愛する仁者にあらず、また
日本帝國を守る勇者にあらざるなり。
凡そ一人民が話す言語とその人民の性質との間に
は最も入り組みたる關係あるものにて、その人民が
一事物に對して感じ、或は考ふるすべてのことは皆

その言語に反射し出づるなり。故に「言語はその話す人の精神の上に生活する思想及び感情が外に出でて化身したるものなり」といふも決して不可なきなり。

試に支那語を見よ、いかに仁義の道がかれらの間に
行はれしかは、歴史を待たずして言語の上に明らか
なり。文人國に詩歌の語おほく發達し、武人國に武
人の語おほく繁昌す。英語の商業における、佛語の
社交における、獨逸語の學術における、皆それごとそ
の人民の長所によりて發達したるものなり。

言語はこれを話す人民にとりては、恰もその血液が
肉體上の同胞を示すが如く精神上の同胞を示すも
のなり。例せば、日本國語は日本人の精神的血液な
りとも謂ひつべし。日本の國體は主としてこの精
神的血液にて維持せられ、日本の人種はこの最も強
かるべく、最も永く保存せらるべき鎖によりて連結
せらるゝなり。故に大難の一度來るや、この聲の響
くかぎり、四千萬の同胞はいつにても耳を傾くるな
り、いづこまでも赴きて飽くまでも助くるなり、死ぬ
るまでも盡すなり。而して一朝慶報に接する時は、

千島のはても臺灣のはしも一齊に君が八千代を壽
ぎ奉るなり。

かくの如く、言語は國體の標幟となるのみにあらず、
これと同時にまた一種の教育者即ち情深き母たる
なり。われくが生るゝやいなや、この母はわれわ
れをその膝の上に迎へとり、懇にこの國民的思考力
とこの國民的感動力とを教込みくるゝなり。され
ば、この母の慈悲は誠に天日の如し。苟もこの國に
生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこ
の光を仰がざるべき。

言語の上には、われくが心中に一日も忘れかぬる
生活、ことに人生の神代ともいひつべき小兒の頃の
記念が結びつき居るものと知るべし。われくが
幼かりし頃、終日の遊に疲れはてゝ、すやくと眠に
就かんとせしをり、母君はいかに優しき聲にて寐よ
との歌を謳ひたまひしか。頑是なき子供心に、わる
ふざけなどしてうち廻りし時、嚴しき父君はいかに
おごそかに教訓を垂れたまひしか。さては夏の日
盛に鄰家の松の樹に攀ぢて蟬を捉へたる、あるは春
のうらゝかなる野邊に友だちと紫雲英などを摘み

あるきたる、すべて當時より用ひきたれる言語は、當時の人名、當時の地名と共に何ともいはれぬ快感をわれくゝに與ふるなり。次には小中學校の言葉、次には學生の言葉、あるひは市民としての言葉、あるひは職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それぐの生活をその上に反映す。故に外國にて人となりたるか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたるかにあらざるか、ぎりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざるものは一人もなかるべし。

されば國民がその國語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ずその自國語を尊び、決してこれを置き、て他の外國語を尊重することなし。情の上より自國語を愛し、理論の上よりその保護改良に従事し、以て眞成の國民を養成せんことを務む。現今の獨逸の如きはその一例なり。凡そいづれの國を問はず、苟も國家の觀念の上よりその國民たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、まづその國の言語、次にその國の歴史、この二つを蔑にしては、決してその功を收むること能

はず。これ國民たるもの、須臾も忘るべからざる
ことなり。(國語のため)

二〇 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕ら
れて鎌倉まで下りたまひしかども、様々に陳じ申さ
れし趣、實にもと赦免せられたりけるが、又今度の白
狀どもに専ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたり
ければ、七月十一日にまた六波羅へ召捕られて關東
へ送られたまふ。再犯赦さざるは法令の定むる所

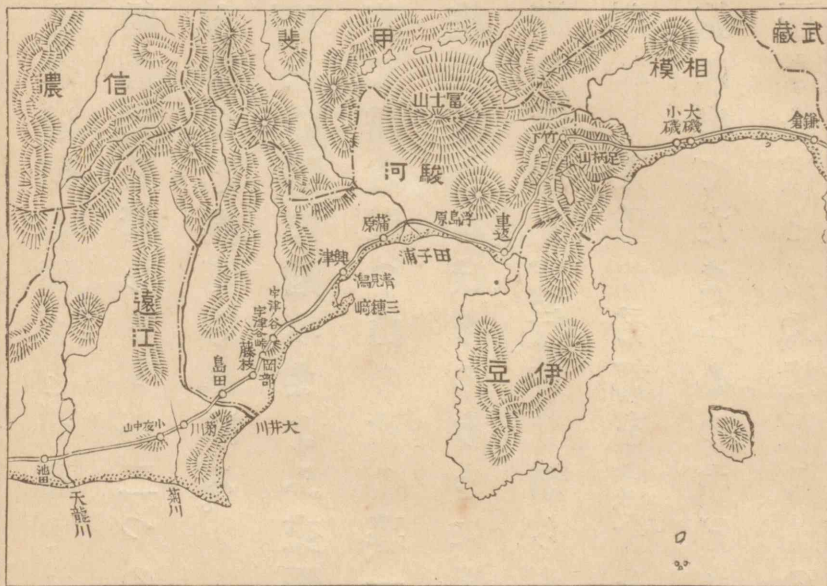
元徳二年。

白狀
罪人
白狀
罪人

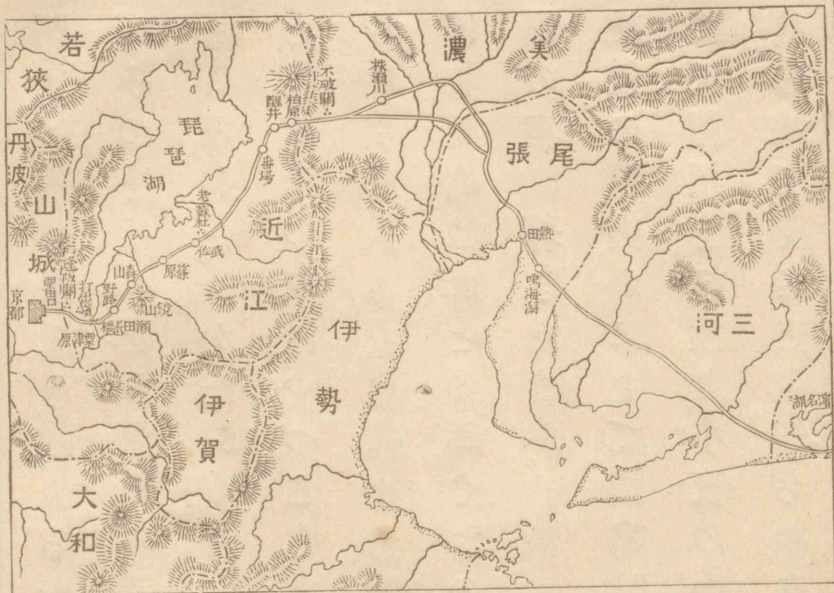
またや見ん
交野のみの
の櫻狩花の
雪ちる春の
曙。
朝まだき嵐
の山の寒け
れば紅葉の
錦さぬ人ぞ
なき。

なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるゝか、
鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひま
うけてぞ出でられける。
落花の雪に踏みまよふ交野の春の櫻狩、紅葉の錦を
著て歸る嵐の山の秋の暮、一夜をあかすほどだにも
旅寝となればものうきに、恩愛の契淺からぬわが故
郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住
馴れし九重の帝都をば、今をかぎりと顧みて、思はぬ
旅に出でたまふ心の中ぞあはれなる。
憂きをばとめぬ逢阪の關の清水に袖濡れて、末は山

近江より朝
立ちくれば
うねの野に
たづねなく
なる明けぬ
この夜は。
白露も時雨
もいたくも
る山は下葉
のこらず色
づきにけり。



路を打出の濱。沖をは
るかに見渡せば、鹽なら
ぬ海にこがれ行く身を
うき船の浮き沈み。駒
もとゝろと踏みならず
勢多の長橋打渡り、行き
かふ人にあふみぢや、世
をうねの野に鳴く鶴も
子を思ふかとあはれな
り。時雨もいたくもり



山の木の下露に袖ぬれ
て、風に露散る篠原や、篠
分くる道を過ぎ行けば、
鏡の山はありとても、涙
に曇りて見えわかず。
物を思へば夜の間にも
おいそのもりの下草に
駒を留めて顧みる、故郷
を雲や隔つらん。
番場醒ヶ井、柏原、不破の

*小夜千鳥聲
こそ近くな
るみがたか
たむく月に
しほやみつ
らん。

關屋は荒れ果て、猶もるものは秋の雨。いつかわ
がみのをはりなる熱田の八劔伏し拜み、汐干に今や
なるみがた。かたぶく月に道見えて、明けぬ、暮れぬ
と行く道の末はいづこととほたふみ、濱名の橋の夕
汐に引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれ
ば、誰かあはれとゆふぐれの晚鐘鳴れば、今はとて池
田の宿に著きたまふ。

旅館の燈幽かにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶え
て天龍川を打渡り、小夜ナツの中山越え行けば、白雲路を
埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みて

年たけてま
た越ゆべし
と思ひさや
命なりけり
さやの中山
中納言藤原
宗行の誤。
南陽縣、
有甘谷。谷
中水甘美。
上有大菊。
落、水從山
流下。得其
滋液、谷中
人家、飲此
水。上壽百
二三十、其
中百餘歲、
七八十者則
爲天。

も、昔西行法師が「命イなりけり。」と詠じつゝ、二度越えし
跡までも羨ましくぞ思はれける。隙行く駒の足早
み、日已に亭午にのぼれば、餉進らする程とて、輿を庭
前にかき止む。轅を叩きて警固の武士を近づけ、宿
の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり。と答へければ、承
久の合戦の時、院宣書きたりし咎に因りて、光親卿關
東へ召し下されしが、此の宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水 汲下流而延齡、
今東海道菊川 宿西岸而終命。

と書きたりし遠き昔の筆の跡、今はわが身の上にな

り、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠みて宿
の柱にぞ書かれける。

いにしへも、かゝるためしをきく川の

おなじ流に身をやしづめん。

大井川を過ぎたまへば、都にありし名を聞きて、龜山
殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鶴首の船に乗り、
詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ夜の夢と
なりぬと思ひ續け給ふ。 島田・藤枝にかゝりて、岡邊
の眞葛うらがれて物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越
え行けば、葛かづらいと茂りて道もなし。 昔業平の

駿河なるう
つ山のべの
うつゝにも
夢にも人に
あはぬなり
けり。

中將の住む處を求むとて、東の方に下るとて、夢にも
人に逢はぬなりけり。と詠みたりしも、かくやと思ひ
知られたり。

富士のねの
煙はなほぞ
立ちのぼる
上なきもの
はおもひな
りけり。

清見瀉を過ぎたまへば、都に歸る夢をさへ通さぬ波
の關守にいとゞ涙を催され、むかふはいづこ、みほが
崎・興津・蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中
より立つ煙、上なきおもひに比べつゝ、明くる霞に松
見えて、浮島が原を過ぎ行けば、汐干や淺き、船浮きて
おりたつ田子のみづからも浮世を遶る車返。 竹の
下道行き惱む足柄山の巔より大磯・小磯見おろして

袖にも波はこゆるぎのいそぐとしもはなけれども、
日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き
たまひけれ。(太平記)

二一 松の下露

さる程に、類火東西より吹かれて餘煙皇居にかゝり
ければ、主上を始め參らせて、宮々卿相雲客みな徒跣
なる體にて、何處を指すともなく、足に任せて落ち行
きたまふ。此の人々、始め一二町が程こそ主上を扶
け參らせて前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈

*元弘元年九
月十三日。

不殺生
不偷盜
不邪淫
不妄語
不兩舌
不惡口
不綺語
不慳貪
不瞋恚
不邪見
河内國南河
内郡赤阪村
大字水分に
城址あり。

しく道暗うして、敵の鬨の聲こゝかしこに聞えけれ
ば、次第にわかれくになりて、後には只藤房季房二
人より外は主上の御手を引き參らする人もなし。
忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に變へさせ
たまひて、そのことも知らず迷ひいでさせたまひける
御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の中に
赤阪の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも
未だ習はせたまはぬ御歩行なれば、夢路をたどる御
心ちして、一足には休み、二歩には立止り、晝は道の傍
なる青塚の陰に御身を隠させたまひて寒草のおろ

山城國綴喜郡。

そかなるを御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露
分け迷はせたまひて羅縠の御袖をほしあへず。と
かうして夜晝三日に山城の多賀郷なる有王山の麓
まで落ちさせたまひけり。

藤房も季房も三日まで口中の食を斷ちければ、足た
ゆみ身疲れて、今はいかなるめにあふとも逃れぬべ
き心ちせざりければ、せん方なくて幽谷の岩を枕に
て、君臣兄弟諸共に現の夢に臥したまふ。梢を拂ふ
松の風を雨の降るかと聞召されて、木のかげに立ち
寄せたまひたれば、下露のはらくと御袖にかゝ

りけるを、主上御覽ぜられて、

さして行く笠置の山を出でしより

あめが下には隠れがもなし。

藤房卿涙を抑へて、

いかにせん、頼む陰とて立ちよれば、

なほ袖ぬらす松のしたつゆ。

山城の國の住人深須入道松井藏人二人、此の邊の案
内者なりければ、山々峯々残る所なく搜しける間、皇
居隠れなく尋ねいだされたまふ。主上誠におそろ
しげなる御氣色にて、汝ら心ある者ならば、天恩を戴

大和國山邊郡。夏の桀王、湯を夏臺に囚ふ。夏臺は夏の代の獄の名。越王勾踐、吳王夫差に破られ會稽山に降る。

いて私の榮華を期せよ。」と仰せられければ、さしもの深須入道俄かに心變じて、あはれ此の君を隠し奉つて義兵を擧げばや。」と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏れ易くして道の成り難からん事をはかりてもだしけるこそうたてけれ。俄かの事にて綱代の輿だになければ、張輿の怪しげなるに扶け載せ參らせて、まづ南都の内山へ入れ奉る。其の體、只殷湯、夏臺に囚はれ、越王、會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを見る人ごとに、袖をぬらさずといふことなかりけり。

大佛貞金、金澤貞將。

光嚴天皇。

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞二千餘騎にて路を警固仕りて主上を宇治の平等院へ成し奉る。其の日、關東の兩大將、京に入らずしてすぐに宇治へ參り向うて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡したまはつて持明院新帝へ參らすべき由を奏聞す。主上藤房を以て仰せ出されけるは、三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて暫く天下を掌に握るものありといへども、未だその三種の重器を自ら擅にして新帝に渡し奉る例を聞か

八咫鏡。

ず。その上、内侍所をば笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば、遂にはよも吾が國の守とならせたまはぬことあらじ。寶劔は、武家の輩もし天罰を顧みずして玉體に近づき奉ることあらば、自らその刃の上に伏させたまはんずるために、暫くも御身を放たるゝことあるまじきなり。と仰せられければ、東使兩人も六波羅も辭なくして退出す。翌日龍駕を廻らして六波羅へ成し參らせんとしけ

るを、前々臨幸の儀式ならでは還幸なるまじき由を強ひて仰出されける間、力なく鳳輦を用意し、袞衣を調進しける間、三日まで平等院に逗留あつてぞ六波羅へは入らせたまひける。日來の行幸に事かはりて鳳輦は數萬の武士に打圍まれ、月卿雲客は怪しげなる籠輿傳馬に扶け載せられて、七條を東へ、河原を上りに、六波羅へと急がせたまへば、見る人、涙を流し、聞く人、心を傷ましむ。悲しいかな、昨日は紫宸、北極の高きに坐して百司禮儀の装をつくるひしに、今は白屋、東夷の卑しきに下らせたまひて萬卒守禦の嚴

諸天命欲終時五死相現。
 一華冠萎。
 二腋下汗出。
 三繩來著身。
 四見更有天坐已坐處。
 五自不樂三本座。

藤原禊子。
 大政大臣藤原實兼の女。

しきに御心を悩まさる。時移り事去り、樂盡きて哀來る、天上の五衰、人間の一炊、たゞ夢かとのみぞ覺えたる。遠からぬ雲の上の御住居、いつしか思しめし出す御事多きをりふし、時雨の雨一通り軒端の月に過ぎけるを聞召して、

住みなれぬ板屋の軒のむら志ぐれ、

音をきくにも袖はぬれけり。

四五日ありて中宮の御方より御琵琶を遣はさるゝに、御文あり。御覽ずれば、

思ひやれ、塵のみつもる四つの緒に

はらひもあへずかゝる涙を。

引返して御返事ありけるに、

涙ゆゑ半ばの月はくもるとも、

ともにみし夜の影は忘れじ。(太平記)

二二 はぎ

葛飾の龍眼寺に萩を見侍りて

朱樂管 江

よそぎれと見ゆは長寺の飾、
 とももうともはぎ、けりて

早春 四方赤良

生疏の禮者見れば大道を
横をたぐふも一まはすまのり

早嶺

早嶺が握りまづ成握りあきて

山の横つらけり風がふく

郭の上に有明の月をたぐ繪に

郭の峰をたぐふに河をたぐふ

後徳大寺のありあきの顔

郭公

頭光

*後徳大寺左大臣實定卿の歌に。郭公鳴さつる方をながむればたぐ有明の月を殘れる。

郭の自由自在にまゝ果は

酒屋へ三里豆腐屋へ二里

絲瓜

本端

世の中は何のへちまと思へども

がうりうりまは暮されもせが

歌人

宿屋飯盛

歌よみは下子ますられ天地の

動き出さすたまふものは

*力をも入れずして天地を動かす目に見えぬ鬼神をもあはれと思はしむるは歌なり。

二三 祖先崇拜

芳賀矢一

社會學上から上代のわが國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の情態で、治者は神祇で、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。又一方から見れば宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家オホヤであつた。かういふ事は強ち我が國に限つた事ではない。猶太の昔にも行はれたし、其の他原始社會にはいくらかも類例のある事である。たゞそれが太古から今日まで持續して來て立憲政治の今日まで殘つて居るといふ事が甚だ珍

しいのである。社會進化論の上に一特例を成したものといつて宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖德太子の方針で今日までの變遷をなして來たにも拘らず、この太古の政體に伴ふ所のカミ・オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴゴロを今日まで少しも失はず、それで何等の争鬪もなく、軋轢もなく、更に西洋の文物制度を入れて立憲政體を爲し得たといふのが面白い所である。この昔ながらの國體で、今日の世界の間に闊歩して行けるといふのが我

が國民の強みである。さてこの神祇政治宗族政治の根本となつて居るものはいふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇して之を畏敬し、之を仰慕する念がなければ、もとよりこの様な政體の成立つわけがない。神話の神々は一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致せられたのである。天照大神は日神、月讀命は月神、素戔嗚神は恐らくは嵐の神であらうが、これと同時に我が民族の中で殊に勝れた尊むべき方々であつたに

相違ない。思兼神や、手力雄命や、天鈿女命や、猿田彦神や皆それぐさういふ方々であつたらうと思はれる。かういふ祖先の人々を祭つて、お祭をするといふことは、即ち共同の祖先を崇拜して、そこに一致團結の政治が行はれるといふ事で、これが神祇政治宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫に下されて、之を視ること吾を視るが如くせよ」と仰せられたのは、即ち祖先崇拜といふことを明らかにせられたのである。即ち三種の神器を受傳へになつた御方が、祖先の正統政治上の元首で、いはゆるカ

ミで、かつオホヤケなのである。それであるから皇位の繼承には三種の神器が最も大事なものになつて居るのである。北畠親房卿が神皇正統記を書いたのも南朝の天子が正統の天子であることを明らかにする爲である。語を換へていへば、我が國體上からいへば、どうしても祖先崇拜といふことを忘れてはならぬのである。

祖先崇拜は支那にもあるが、支那の様な革命の國では、是が國家と結びついては何の意味をもなさぬ。羅馬や希臘にもあつたが、今は跡方がない。日本で

は昔の神祇政治・宗族政治の政體が今日まで連続して残つて居るから、宗廟を尊み、之を祭することは、大昔から今日まで政治とは離れられぬ關係をもつて居る。神武天皇が御即位の式に神籬を鳥見山に作つて祖宗をお祭りなされたのは即ち之が爲である。今日でも毎年一月四日の御政始には、先奏伊勢神宮之事といふ事がある。これは大寶令時代からの定まりである。之を單に昔からの習慣とのみ見るのは間違である。今日でも國家的意味のあることである。宣戰・講和の詔敕を發し給ふときに大廟にお

告になるのもその意味からである。東郷大將が凱旋して大廟に參詣し、伊藤統監が韓國に赴任するに就いて參宮を果すといふのも、この理由によるのである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、又は歸朝した人などが拜謁と同時に參拜を仰付けられるのもこの政體の上からの意味をもつて居る。「日本は神國なり。」と昔から人のいふのはこれが爲である。神といつても後世に發達した神道各派の神をいふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の自由といふことには何等の關係がない。苟も

日本の國土に生れて日本國の臣民たるものは、カミとオホヤケとに對するマゴコロから祖宗の靈を尊ぶといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴つたことである。

朝廷に於て大廟を御崇敬になるばかりでなく、この事は深く國民の間にもしみ渡つて居る。一生の中に一度は大神宮に參らねばならぬとは、如何なる僻地を耕して居る農民でも常に思つて居る事である。抜け參りといつて、殆ど無錢旅行をしてまでも陸續として出かけるのである。各郷各村に神明の社の

きながら、一方にはしきりに王法を守れと説いたのは、よく我が國民性に投じて、眞宗の今日の盛大をなした一原因であらう。「佛は九善、王は十善」といふことがどこまでも國民の信じて居る金言である。

(國民性十論)

二四 東郷大將

尾崎 行雄

古來の英雄何ぞ限らん。若しそれ細觀詳察して其の性行を彙類する時は、千態萬狀筆紙の能く盡す所にあらざるべし。然れども試に大別して二種とす

ることを得。一は即ちはでなるものにして、他は即ちぢみなるものなり。

所謂はでなるものとは、力めて顯彰若くは誇揚せんとし、然らずとも時に應じ機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる者を指す。而して此の中又分ちて三様の類を品することを得。彼の好んで自己の功業を語り、勳績を述べ、舉止鷹揚、眼中人無きが如き者は第一類に屬す。或は恭謙士に下り、時に喜んで施與し、故らに弊衣を纏ふが如きは全く第一類と其の途を異にすれども、深く心裏に入りて剖析する

鷹揚 オウヤウ

かまへること

勢の強きこと

史乘—史のこと
 光芒—光きらりとしれり
 陸離—参差と同じ敷き貌
 散乱—光輝の貌、迅疾の貌
 美妙の貌

ときは、其の自己を顯彰若くは誇揚せんとするに於て些の異なる所を見ず。唯手段方法に積極と消極との差あるのみ。之を第二類とす。故らに斯る手段方法を取らざれども、時に應じ機に觸れて胸中の英氣を煥發するを辭せざる者は蓋し第三類か。一舉一動他人の視聽を惹き、延いては則ち一代の聲譽となり、流れては則ち後世の史乘となる。光芒陸離、才華爛漫、世間凡庸の徒をして跪拜して近づく能はざるが如き感を懐かしむるものは、所謂はてなる英雄の事なり。但しぢみなる英雄に至りては多く

才華—才智に同じ
 心のはたらき

之に反す。

所謂ぢみなる英雄は、力めて自己を顯彰若くは誇揚するに意なきは勿論、如何なる時に際しても、胸中の英氣を發することなし。是の故に凡庸者流或は看て以て無能となす。唯事業の大局を達觀し、性行の全體を通覽する者にして、始めて異常傑出の人たるを解す。乃ちぢみなる英雄の本色は、些の衒氣なく、矯飾なきは言ふを待たず。寧ろ自ら異常傑出の人たるを悟らざる底の所に在り。之を名畫に譬へんか。はてなるものは猶密畫のご

鉅匠——すむかし匠
凡神——人の風采をいふ

とく、ぢみなるものは猶疏畫のごとし。樹枝草葉の微に及ぶまで曲に描寫の妙を極むるは密畫の名手なり。兒童走卒といへども亦時に其の美を解することを得。疏畫の鉅匠に至つては筆を用ふる事少く、逸氣風神唯其の一點一畫の上に流動す。畫に老けたる者にあらずんば決して其の妙を認識すること能はざるなり。形迹は倣ふべくして風神は模し難し。是密畫に偽作多くして、疏畫に贗物少き所以か。世の小才を抱き、奸智を用ふる徒が、動もすればはてなる英雄を擬

して當面を彌縫するを得るも、畢にぢみなる英雄を學ぶ能はざるは亦宜ならずや。

今や東郷大將の大名は赫灼として五洲の外を燭せり。然れども其の一言一行の上に於て果して特異なる點あるか。警欬に接する者は唯其の溫厚謙虛にして多く語らざるを見るのみ。功績を觀る者は唯其の露國の太平洋艦隊波羅的艦隊を殲滅したるを知るのみ。筆を操つて言行の細を傳へんとする者が其の材料の匱乏に困しむ看ある、良に以ありと謂ふべし。

多く語らずといへども、十萬の貌貅は其の一令に聽いて生命を鴻毛の輕きに比し、言行の特筆すべきものなしといへども、赫灼たる大名は遠く五洲の外を燭す。我是に於てか所謂ぢみなる英雄の實際を目前に睹ることを得たり。

聞く、東郷氏西郷南洲と郷曲を同じうし、少時其の門に出入して屢其の教を受けたりと。蓋し深く私淑する所ありて然るか。余の氏に於ける一二回の面識に過ぎず、豈善く其の性行を識ると謂はんや。但し氏に敬服するは、氏が蓋世の偉功を奏しながら毫

*
入_二公門_一、
鞠躬如也。如
不_レ容。

も之を自覺せざるものゝ如くなるにあり。王莽の恭謙は以て愚夫愚婦を欺くべし、以て識者を欺くべからず。東郷氏の鞠躬如たるは作意の恭謙に非ずして自ら其の功業の偉大なるを知らざるが爲なるに似たり。蓋世の偉功は悉く是部下將卒盡瘁の結果にして、我が智謀の結果に非ずと確信するが爲なるに似たり。功は則ち人に譲り、過は則ち自ら居るといふに非ずして、自身其の勳功を覺知せず、獨り部下將卒の勳勞を思念するが爲なるに似たり。天地を震撼する萬歲聲裏に驩迎せらるゝに當つて、まづ

氏の胸中に浮ぶは配下の死傷者なるべし。唯夫此の心あり、以て十萬貔貅の死力を收むるを得べし。曠古の偉勳を奏して之を自覺せず。是東郷氏の東郷氏たる所以にして、所謂ぢみなる英雄の最上乘なるものにあらずや。(愕堂集)

師範學校 國文教科書 本科用卷三終

師範學校國文教科書 本科用卷三

明治三十六年五月五日印
 明治三十六年三月八日發行
 明治三十七年二月廿六日訂正再版印刷
 明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
 明治四十五年二月九日訂正十四版發行
 明治四十二年二月廿八日訂正十二版印刷
 明治四十二年三月三日訂正十二版發行
 明治四十四年七月十二日訂正十三版印刷
 明治四十四年七月十六日訂正十三版發行

正卷一、二、三、各金三拾五錢
 價 卷三、四、六、各金三拾錢



編者 吉田彌平
 發行者 東京市小石川區高田老松町五十二番地
 上原才一
 東京市神田區裏神保町六番地
 發行所 光風館書店
 東京市神田區裏神保町六番地
 (電話本局二千三十九番)
 (振替貯金口座東京三二七番)

印刷者 矢島一三
 東京市神田區裏神保町六番地

本館發行之教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

